「１年間の研修を振り返って」

本　田　　将　貴

１　はじめに

一斉休校から始まった今年度。子どもが来ない学校や在宅勤務で仕事をすることを強いられたこの期間は，自分にとって様々な気づきを与えてくれた。子どもたちと直接関わりながら教育をすることができることは，とても素晴らしいことなのだということ。学校教育とはあくまでも家庭教育の延長線上にあるものなのだということ。そして何より，子どもたちは家庭と学校の両輪によって大きく成長するのだということである。

義務教育という強制的な教育の場は，時としてネガティブなイメージを植え付けられがちである。しかし，たとえどのような経緯があったとしても，汗を流して経験した過程には必ず価値が生まれると思う。それは，子どもたちの表情を見ていれば明らかだ。このような，与えられた環境で教育活動する教師という仕事は，教師一人一人の捉え方によっては，楽しいものにも苦しいものにも変わる。もし，自分以外の全員がこの仕事に対して不満を言っていたとしても，自分だけは目の前の子どもたちのために全力を尽くせる教師でありたいと思う。

２　コロナで変わったこと・わかったこと

休校が明けてからの学校の教育活動は，これまでとは大きく変わってしまった。今まで普通にできていた行事は中止や縮小され,普段の学習活動も感染リスクの伴う活動は自粛。毎日の健康観察カードの提出。マスク着用の義務化…。今となっては慣れてしまったが，この気持ちになるまでに何度ため息をついただろう。保護者の反応や世間体を気にするあまり，積極的な教育活動が行えない現状は，私にとって息苦しいもの以外の何物でもなかった。この多くの経験と気づきは，これからの教育現場で何年も何十年も語り継がれていくのだと思う。

しかし，いいこともあった。全校児童が一堂に集まる学校行事は行うことができなくなったが，その分，子どもたちと長く関わることができたからだ。また，急を要しない出張もなくなり，より一層子どもたちのために時間を使うことができるようになった。退勤時間も早まり，家族との時間を大切にすることもできた。また，マスクのおかげでコロナ以外の風邪や感染症の感染率が大幅に減ったそうだ。これは本校の研究内容でもある健康教育にもつながる良いきっかけにもできると感じている。

しかしながら,このような行事の少なさに退屈さを感じる人もいるかもしれない。だが，少なくとも私にとってはとても充実した期間だった。

また,しばらくすると,全世界的にコロナとの向き合い方が定まってくるようになった。日本全国の教育機関でも様々な工夫を講じてできるだけ多くのより良い経験を子供たちにさせることを推奨してくれるようになった。何が正解で，何が不正解かが誰にも分かりに

くいこの状況において，これまで以上の教育効果を発揮できる活動を、クリエイティブに考える機会を得ることができたのである。あとは自分次第だ。自分自身が先生方に働きかけ新規活動を提案するもよし。誰かの提案を後押しより良い教育活動を支援するもよし。若手の学級経営をサポートするもよし。様々な選択肢が増えた中で，自分の立場や学校での立ち位置を踏まえてより良い行動をとっていきたい。

３　「挑戦」

最後に，昨年度の思いを作詞で表現したい。

挑戦

私は誰か出てきている
誰かが作った服を着て
誰かが作った飯を食べ
誰かが作った乗り物に乗り
誰かが作った道を歩く

私が作ったものはなんだろう
私が生み出したものはなんだろう
私がここにいる理由は
誰が作ってくれるのだろう

自分にしかできないことがある
自分だけが生み出せるものがある
確かに誰かに支えられて
確かに誰かに守られている
それでも自分はここにいる
だからこそ考える
自分がここにいる理由を

物の価値は誰が決めるのか
人の価値は誰が決めるのか
みんなが自分の答えを探してる
私も私の答えを見つけたい

自分にしか作れないものを作り
自分にしか生み出せない価値を生む
そんなかっこいい人ではないけれど
挑み続ける覚悟はある
向かい風の嵐に立ち向かう
私の人生は私のもの